

令和6年度学校自己評価（最終）

鳥取県立智頭農林高等学校

中長期ビジョン (学校ビジョン)		「地域産業及び社会の発展に貢献できる人材の育成」 ～一人一人の生徒を大切にしたい教育の実践～		本年度 重点目標	1 専門教育の充実 2 学力向上 3 キャリア教育の推進 4 こころの教育の充実 5 地域連携の充実 6 情報発信の充実	(1) 質の高い専門教育の実践 (2) 資格取得の推進 (1) 基礎学力の定着 (2) 授業力の向上 (3) ICT等を活用した教育の実践 (1) 進路指導の充実 (2) 職業観・勤労観の育成 (1) 規範意識の醸成 (2) 自己理解・他者理解に基づいたよりよい人間関係の構築 (3) 自己肯定感の育成 (1) 地域の教育資源の活用 (2) 科の特色を生かした地域連携の推進 (1) 学校ホームページ、体験入学、中学校説明会などにおける本校の魅力の発信 (2) 広報活動の充実			
年度当初						中間評価（ 10 ）月	最終評価（ 3 ）月		
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	経過・達成状況	改善方策	
1 専門教育の充実	(1) 質の高い専門教育の実践 (2) 資格取得の推進	○「スーパー農林水産業士」認定者数はR3年度2名、R4年度1名、R5年度4名で、「アグリマイスター制度」の認定者数は、R3年度1名、R4年度0名、R5年度1名であった。 ○実習は少人数で丁寧に指導を行っているが、生徒の主体的な活動にまで至っていない。 ○資格取得に対して、意欲的な生徒と無関心な生徒の二極化が見られる。	○地域産業との連携を有効活用し、「スーパー農林水産業士制度」「アグリマイスター制度」などの高度な知識と技術を必要とする専門性の高い制度を活かした進学・就職ができる。 ○生徒自らが目標を設定し、その目標に向かって主体的に学習に取り組んでいる。 ○卒業までに専門教育の学習を活かした資格を1つ以上取得している。	○毎日の授業の中で、地域産業や教育機関との連携を深めるとともに、社会人講師等を積極的に活用し、高度な技術を習得する。 ○職員で個々の生徒の状況を共有し、連携しながら、生徒が目標をもって学習できるよう働きかける。 ○授業で基礎基本を学習した上で、資格取得に臨む指導を行う。	○地域の産業界との連携をスムーズに行うことができており、生徒個々の高度な技術の取得につながっている。本年度は「スーパー農林水産業士制度」取得に3名が挑んでいる。 (R4：1名、R5：4名) ○校内での情報共有と連携ができていて、 ○資格取得のHHRを各科で行い、生徒の積極的な取得を促した。	B	○引き続き地域産業界との連携を進めていく。 ○引き続き校内で連携しながら、生徒の支援や指導を行っている。 ○資格取得に向けて指導を継続する。	○スーパー農林水産業士に認定された生徒3名は制度を活かした進路選択につながることができた。アグリマイスター認定制度の認定者は無かった。(R5：1名) ○生徒アンケート(12月)の「授業中は先生の話をよく聞き真面目に取り組んでいる」の項目が93.4%であった。 ○3年生については、卒業までに専門教育の学習を生かした資格を1つ以上取得することができた。	○アグリマイスター制度の認定者を増やすために、1年次から関係する資格を取得するよう計画的な指導を行う。 ○生徒の状況を確認、情報共有しながら複数で生徒に働きかける。 ○引き続き校内連携を進め資格取得に向けた支援を行う。
2 学力向上	(1) 基礎学力の定着 (2) 授業力の向上 (3) ICT等を活用した教育の実践	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を通年で実施し、基礎学力の向上につなげている。 ○多くの生徒が専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる。 ○ICTは授業での活用は進んでいるが、より効果的な活用を研究する必要がある。	○成功体験の積み重ねや学び合いのある授業、ICTを活用した授業、授業のユニバーサルデザイン化などの取組が組織的に行われており、生徒の基礎学力向上につながっている。 ○生徒の授業アンケートの「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目が90%以上、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目が80%以上になっている。 ○教職員によるタブレット端末の活用環境が整い、ICT機器を活用した教員の活用実践が高まっている。	○各教科の基礎的学力対策を集約して共通理解を図り、授業に生かしていく。 ○質の高い専門教育を実践し、生徒の学習意欲を高める。 ○タブレットを活用した授業研究会や授業実践報告会、各種研修会などへの参加をとおして、実践力の養成を推進する。	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を実施している。 ○生徒アンケート(7月)の「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目は95.3%、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目は約81.4%であった。 ○授業研究会を開催して授業力の向上につなげている。また、各教科でGoogleクラスルームの開設やプロジェクターを使用した授業展開によりICTを活用した教育活動に取り組んでいる。	B	○SPI1テスト結果を踏まえ、各教科で基礎的学力の向上の取り組みを進める。 ○専門教科において、外部講師を活用するなど、授業内容の充実を図る。 ○授業者に対してICT機器利用等のアンケートを実施し、積極的な活用につなげる。	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を通年で実施した。 ○生徒アンケート(12月)の「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目は97.4%、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目は88.2%で目標を達成した。 一方で、3年時実施のSPI1テスト結果において総合得点率が全国と比較してマイナス11ポイントの低い結果であった。 ○2回の授業研究会を開催して授業力の向上の取り組みを進めた。結果、各教科でGoogleクラスルームの開設やプロジェクターを使用した授業展開など、ICTを活用した実践が広がっている。	○SPI1テスト結果を踏まえ、各教科で基礎的学力の向上の取り組みを進める。 ○授業研究会を通じて、ICT活用力と授業デザイン力の高揚を図る。 ○教室のプロジェクターを活用しやすい環境に整える。
3 キャリア教育の推進	(1) 進路指導の充実 (2) 職業観・勤労観の育成	○勤労意欲は高いが、継続的な学習に取り組めず、基礎学力の向上が求められる生徒がみられる。 ○本校の教育内容と関連した企業への就職や学校への進学が一定数ある。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えてきている。	○専門的な技術を習得して、地域の担い手として地域社会に貢献しようとする意識を持っている。 ○上級学校への進学を目指し、意欲的に専門的な資質・能力を習得し、地域の将来を担う人材を育成する。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合が40%を超える。	○「ふるさとキャリア教育全体計画」に従い、生徒個々のキャリア発達を促す。 ○インターンシップ、校内企業説明会、上級学校見学会および社会人を活用した事業等をおとして、自己実現について考える。 ○適切な進路情報を発信することで、生徒の意識を高める。	○就職試験等に対応できる基礎学力向上の取組が急務である。 ○校内企業説明会は有意義であったが、1・2年生の参加は少なかった。インターンシップ、上級学校見学会、進路セミナー等は今後開催予定。 ○校外模試や進路テストなどで、進路意識の向上に努めているが、生徒の関心が薄い。	B	○学校全体で基礎学力や一般常識の向上につながる取組を継続する。 ○引き続き予定している計画を実施していく。 ○進路面談等をおとして、生徒個々に応じた進路意識の向上を図る。	○進路セミナー、社会人セミナー、キャリア講演会等を通して勤労観や社会性の習得につながった。特に、インターンシップは有効であった。生徒アンケート(12月)の「学校で学んだ知識を活かして将来は地域に貢献したい」の項目は73.7%であった。(R5：84%) ○上級学校への進学者の割合は30.4%であった。(R5：43.3%) ○校内企業説明会への参加者は、延べ89名であった。本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合は52%であった。(R4：56%、R5：50%)	○1年時から進路意識を高める取組を探る。(進路面接の実施、基礎学力の向上、家庭学習の推進等)
4 こころの教育の充実	(1) 規範意識の醸成 (2) よりよい人間関係の構築 (3) 自己肯定感の育成	○生徒は学校の規則に則り学校生活を過ごしている。コミュニケーション能力の不足や他人の気持ちを察することが苦手な生徒間のトラブルはある。 ○人間関係の構築に困難な生徒が在籍しており、生徒への支援や指導、教育相談部との面談を実施している。 ○学校生活全体で人権教育に取り組んでいるが、相手に対する思いやりに欠ける言動がみられることがある。 ○週1回の執行部連絡会の定例化により行事の目標の明確化や役割分担がわかりやすくなり主体的に活動できた。それをクラス役員にも広げることができた。これを継続していきたい。	○生徒が安心・安全に学校生活を過ごすことができる体制を構築する。 ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いて学習に取り組んでいる。 ○生徒一人一人の人権意識が向上し、現在よりも相手に思いやりをもった言動ができるようになる。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動の経験を通して自主性・積極性・協調性を身につけ、自己肯定感へつなげる。	○問題行動への対応のみならず、授業規律の徹底や学校行事などをおとして自己肯定感や自己有用感を育成し、問題行動の予防に努める。 ○担任・関係職員と保護者、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたる。 ○昨年度と同様、日常生活や人権LHRでの積極的な取組が必要である。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動を主体的に企画・運営し、そこに参加することで多くの生徒が経験値を上げ、リーダーシップを養い学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、同じな困難や課題を抱える生徒が増えているが、学年と分掌で連携して細やかな指導を行うことにより問題行動の未然防止に努める。 ○気になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことを行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	B	○生徒の多様化が進み、様々な困難や課題を抱える生徒が増えているが、学年と分掌で連携して細やかな指導を行うことにより問題行動の未然防止に努める。 ○気になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことを行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、同じ生徒が複数回指導を受ける傾向があるためと思われる。日頃から問題行動の早期発見と早期対応に努め、各学年や各分掌と連携して取り組み重大事となることを防止している。 ○学校生活等に関する悩みや不安な生徒に対して面談を実施し、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーにつなぐ対応も行った。 ○人権LHRおよび事前事後学習会、人権委員会を計画通り行い、人権意識の向上に取り組んだ。また、状況に応じて生徒の個別指導を行った。 ○毎週生徒会執行部会を開催し、生徒が主体的に学校行事等の企画・運営を行えるよう努めた。執行部のみならずクラス役員の活動の場も増え、学校を活性化させるとともに活躍することで自己肯定感の向上につながった。	○問題行動の予防には、日頃から職員間で生徒の情報を共有し対応していくことが必要である。また、保護者や外部機関との連携も重要である。 ○関係者と情報共有を密におこない、居心地の良い学校生活が過ごせるよう生徒の支援・対応に努める。 ○身近で起こる言動やSNSに関わるトラブルが起る危険性(教員が知らない場面も含めて)が高くなっているため、LHRなどで未然防止のための取組を現在より計画的に行う。 ○引き続きクラス役員活動を活性化させるとともに定例的な活動を増やしていく。
5 地域連携の充実	(1) 地域の教育資源の活用 (2) 地域連携の推進	○ちのりんショップ、地元の保育所との菜園活動や藍染め交流、福祉施設での実習など、地域交流の場ができており、様々な人との関わりを体験することができている。 ○地域連携活動を発信して本校の特色や魅力をPRしている。 ○地域産業の「藍染」「格子戸」「造園」等、地元職人と連携した活動を行っている。	○地域連携事業の活用により、地域の方との交流をおとしてコミュニケーション力や表現力が向上している。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○地域連携の取組が浸透し評価され、地域アンケートの各取組について「良い活動」と「まあまあ良い活動」と回答している割合と「地域の活性化に役立っていると思いますか」の項目が90%以上になっている。	○地域の保育園・高齢者福祉施設との園芸交流、藍染め交流、智頭恒魅力アッププロジェクトの格子戸作成、ちのりんショップの取組をさらに推進する。 ○地域住民と関わる機会を増やし、主体的な活動の場を設ける。 ○地域産業との連携や「地域基礎」の一層の充実を図る。	○各科の地域連携を通じて生徒が様々な体験をおとしており、充実した連携となっている。 ○地域連携の活用により地域住民・産業従事者と係わる機会が増える。 ○「地域基礎」の授業の一環で取り組んでいるフィールドワークを通じて、地域の方と触れ合う機会				